

駒場野公園の概要

クヌギなどの雑木林とその林床に咲くスミレが見られる木道や、サギやカワセミが来る大池、23区でも数少ない水田として歴史あるケルネル田んぼ等、昔ながらの里地・里山の風景が都会の中に今も残っている公園です。



駒場野公園の歴史

この一帯は、かつて人の背ほどもある笹が一面に生え、ところどころに松林がしげる広い原野で、駒場野と呼ばれていました。

明治になると、農業の近代化を図るため、この広い原野を利用して駒場農学校が開校し、近代農業の総合的教育・研究の場となりました。1881(明治14)年、この農学校にドイツ人のケルネル氏が農芸化学の教師として着任し、土壌や肥料の研究を行って大きな成果をあげました。

園内にある水田はこの実験を行った場所で、農学発祥の地「ケルネル田んぼ」と呼ばれ、稲作は筑波大学附属駒場中・高等学校の生徒によって今でも行われています。駒場農学校はその後東京農林学校、東京帝国大学、農科大学等を経て、東京教育大学農学部となり、1978(昭和53)年に筑波へ移転しました。その移転跡地に造成されたのが駒場野公園です。

2007(平成19)年度には、南側の旧総務省跡地の部分が拡張され、大きな広場が設けられました。

開園から現在まで

主に变化したこと

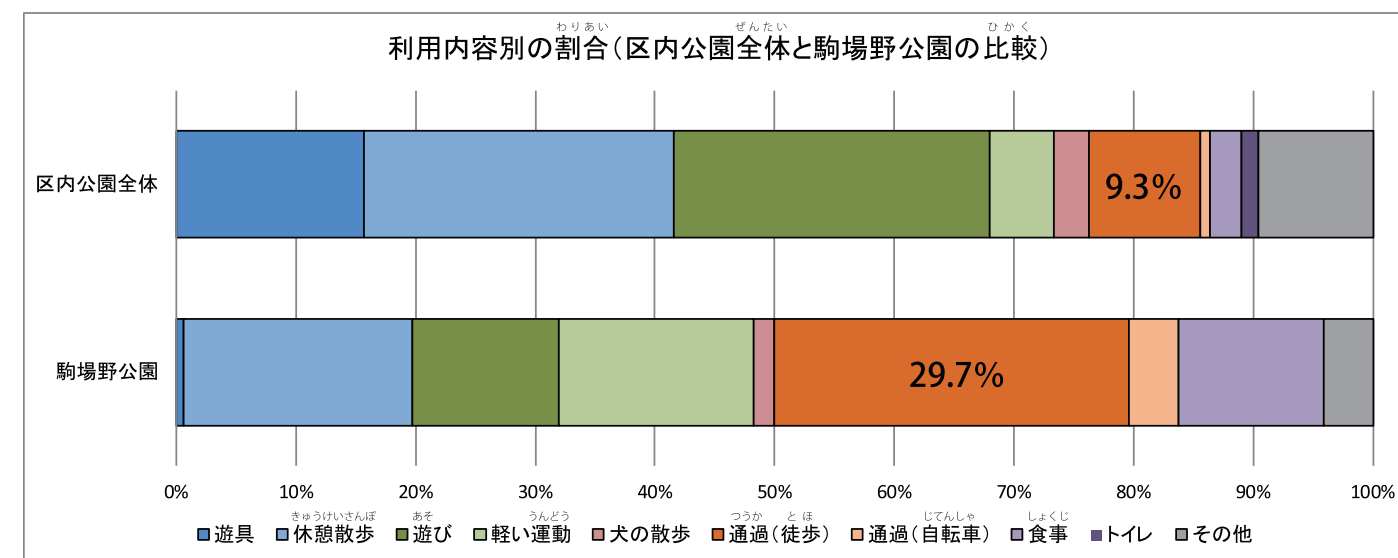
公園の利用状況、自然環境、いきものの生息状況等



※森が育ち地面が見えなくなっています

利用状況の変化

- ・1996(平成8)年の自然観察舎の完成により、公園を横断する道(動線)が整備されました。
- ・整備に伴い公園の利用者の変化、イベントやお祭り等によりエリア活用の広がりがみられます。



目黒区公園等利用実態調査(2014(平成26年))

区内の公園の中でも、駒場野公園の利用は通過する人の割合が高いことが上のグラフからわかります。また、軽い運動や食事など、憩いの場となっていることもわかります。

自然環境の変化

開園から30年以上経過し、園内の樹木が大きく成長したため、ひなたや日陰の環境が大きく変化しました。この変化に伴い、草本類の減少などいきものの生息状況も変化しました。

樹林地

立派な樹林が育ちましたが、大きな樹木の日陰になることで次世代の若木や果樹、野草がうまく育たなかったり、枯れてしまっているようすが見られます。大きな樹木自体も老木になり、枯れ枝が目立つものがあります。



開園当初



2018年



暗くなった林内

水辺地

大池は木に覆われて暗くなったりヘドロがたまったりして、明るい水辺を好むいきものが住めなくなっています。



開園当初の大池



2018年の大池



開園当初の田んぼ



2019年の田んぼ

広場

踏圧によって樹木の根が露出し、サクラなどの樹木が衰弱しています。



根の露出



衰弱化



草地

踏圧によって土が固くなることで、草が根をはれなくなり、土も流出しています。



2011年

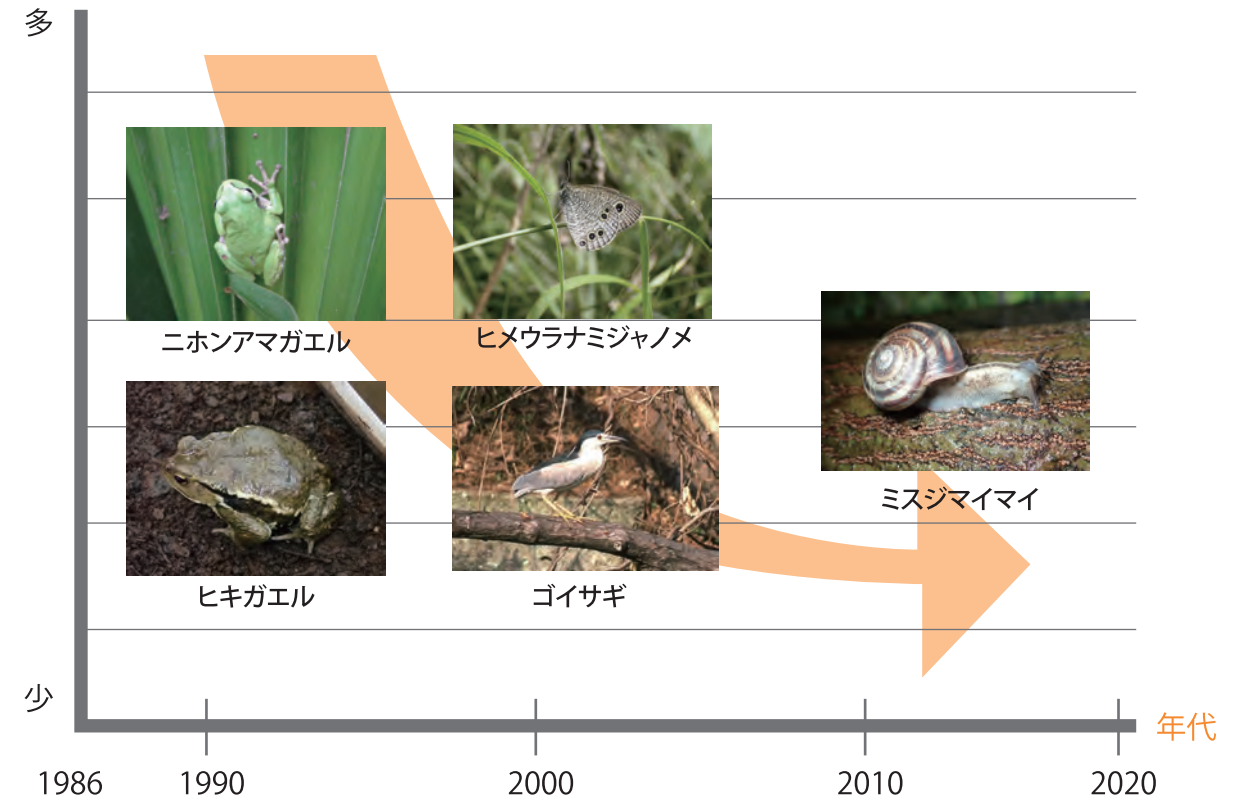


2018年

いきものの生息状況の変化

近年減った、あるいは見られなくなったいきもの

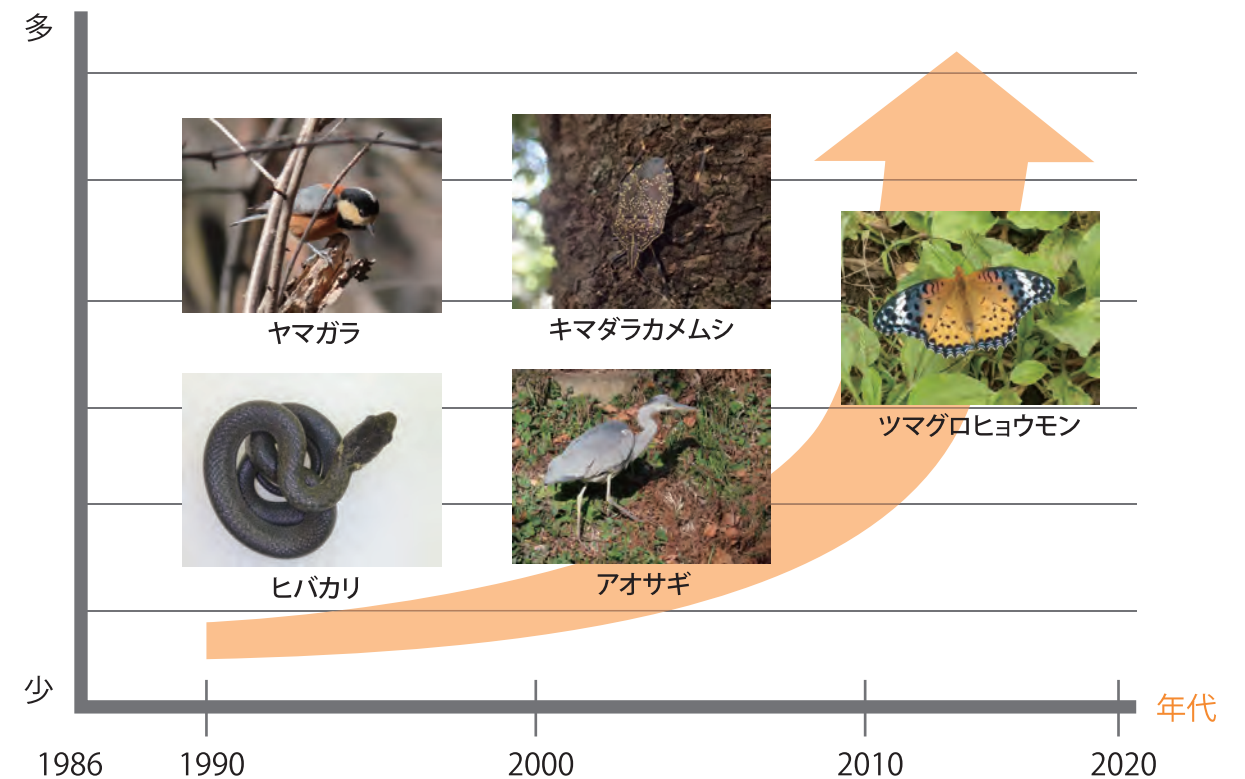
観察件数



在来種の中でも23区内で特に生息数が減っている種が、園内でも減少傾向にあります。

近年みられるようになったいきもの

観察件数



もともと関東より南方に生息していたツマグロヒョウモンやキマダラカメムシをはじめ、近年都市の市街地内でみられる種が増えてきています。

公園未来マップ

2013(平成25)年度に、目黒区生物多様性地域戦略の策定に向け、公園で活動するボランティア団体や地域の子供達、公園利用者からの意見を集め、駒場野公園の「公園未来マップ」を作成しました。

この公園未来マップはこれまでの管理方針の目標に加え、現在までの変化を踏まえ、いきものに配慮した公園の将来像として示したものです。

ゾーン	テーマ・例えばどんな場所なのか
いきもののゾーン	テーマ いきものの生息を重視するエリア ～例えば～ 鳥の巣作りの場や小動物の隠れ場、虫の食事場所やすみかとなる樹林地、やぶ、草地。 地下水のかん養の役割を持つ樹林地や水辺地。樹木や草地と一体となった水辺地。 剪定や伐採で出た枝や幹、枯れ枝、落ち葉などを積んでおく場所(エコスタック)。 保全活動やいきもの調査の場。
めぐみのゾーン	テーマ 里地・里山、人と自然の共生を目指すエリア ～例えば～ 雑木林、果樹園、田んぼ、畑、きのこ栽培地、草地、落ち葉ンク(たい肥作り)、活動用具倉庫、野鳥の水場、説明型表示板等。
ふれあいのゾーン	テーマ 花木の観賞やレクリエーション等、人と自然のふれあいを重視するエリア ～例えば～ 花木の観賞、散策、草地などでの自然観察、レクリエーション、デイキャンプ、おまつりの開催場所等。



※この図は、平成25年度に作成した公園未来マップを現在の状況に合わせて、範囲の一部を改変しています。

未来マップに向けた管理

公園全体の考え方

【やすらぎ・憩いの場の提供】

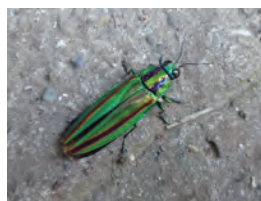
自然環境を守り伝えていくことで、公園を訪れる人にとってやすらげる場、憩いの場となるような公園を目指し、以下の考え方で取り組みます。

1 森や池に光を入れる管理

里地・里山の風景をテーマに、若木の生育を妨げている園内の樹木を数十年かけて少しずつ剪定や伐採をして林床を明るくします。また、多様な環境を維持しながら「目標指標種」(P37～)を参考に、新たないきものの出現を目指します。昔ながらの雑木林の管理方法もあわせて続けていきます。



タチツボスミレ



タマムシ



オニヤンマ

2 草地ややぶ、朽ち木を残す

草刈り方法を工夫し、広場の草地や樹林地内のササやぶ等に多様ないきものが見られることを目指します。また、落ち葉はたい肥にし、園内で切った枝等は炭焼きや枝を束ねて柵(そだ柵)に利用するなど、昔ながらの里山管理方法を実践していきます。そだ柵や朽ち木は、小動物の隠れ家(エコスタック)になったり、採餌のため鳥が集まったりします。



オンブバッタ



コクワガタ



ジョウビタキ

3 普及啓発・次世代へつなぐ

その場所がどんな林や環境を目指して管理されているのかを示す学習看板の設置や、イベント等での普及啓発を行い、活動リーダーの育成を図ります。また、区や地域の皆さんで定期的に管理方針を見直す機会を作り、駒場野公園の歴史や活動を次世代へつなげていきます。

サクラ再生実行計画

2020(令和2)年度に、公園で活動するボランティア団体や地域の皆さん、公園利用者から意見を集め、「駒場野公園サクラ再生実行計画」を作成しました。

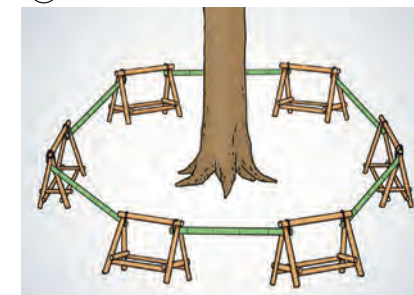
本計画は、桜の現状の問題点や課題に対し、桜景観の再生方針の目標を立て、駒場野公園の将来像を示したもので、長期にわたり進めていきます。

テーマ「春と秋、桜が織りなす駒場野公園の情景を将来に引き継ぎます」

② 小型桜の保全・更新



③ 可動式進入防止柵の設置



① 北門桜並木将来像



駒場野公園の桜景観将来像

サクラのエリア

① コヒガン・ソメイヨシノ並木エリア

② 広場(低木～亜高木)エリア

③ 広場(高木)エリア

④ 八重桜並木エリア

⑤ 駒場野公園拡張部

⑤ 土壌改良(エアレーション等)

